

第3回

民俗芸能Now!

in 東北

民俗芸能がつなぐ「絆」

～震災から10年、更なる未来をみつめて～



雄勝町伊達の
黒船太鼓

宮城県石巻市雄勝町

鵜住居虎舞

岩手県釜石市



請戸の田植踊

福島県双葉郡浪江町

12月11日〈土〉

開催日時

令和3年

開催場所

マルホンまきあーとテラス 小ホール
(石巻市複合文化施設)

主催

一般社団法人全国農協観光協会

協力

縦糸横糸合同会社

後援

内閣府地方創生推進事務局、農林水産省、観光庁、岩手県、福島県、宮城県、石巻市、石巻市教育委員会、釜石市、浪江町、一般社団法人全国農業協同組合中央会、岩手県農業協同組合中央会、宮城県農業協同組合中央会、福島県農業協同組合中央会、JAいしのまき、公益社団法人全日本郷土芸能協会、株式会社農協観光



民俗芸能がつなぐ「絆」

～震災から10年、更なる未来をみつめて～

公演内容

- 13:00 開演
- 13:00～ 主催者挨拶
- 13:05～ 来賓挨拶
- 13:10～ 第1部

出演3保存会の市町村紹介、民俗芸能披露

岩手県釜石市
「鶴住居虎舞」
福島県双葉郡浪江町
「請戸の田植踊」
宮城県石巻市雄勝町
「雄勝町伊達の黒船太鼓」

- 15:10～ 休憩
- 15:20～ 第2部

パネルディスカッション

民俗芸能がつなぐ「絆」
～震災から10年、更なる未来をみつめて～

鶴住居青年会 会長 小原正人
請戸芸能保存会 舞倉美咲
雄勝町伊達の黒船太鼓保存会 事務局長 四倉由公彦

モデレーター：
縦系横系合同会社 代表 小岩秀太郎
岩手県一関市出身。郷土芸能「鹿踊」継承者。全日本郷土芸能協会理事の傍ら、脈々と伝わる“地域文化”を新分野や次代と繋ぎ合わせる縦系横系合同会社を、東日本大震災を契機に設立。

- 16:00 閉演

開催方法・定員

会場・後日オンライン配信

- 会場開催：満員300名のうち新型コロナウイルス対策として1/2以下、定員120名
- オンライン開催：イベントの模様を後日動画配信

主催者挨拶

一般社団法人全国農協観光協会

代表理事会長

櫻井 宏

第3回民俗芸能Now! in 東北 民俗芸能がつなぐ「絆」～震災から10年、更なる未来をみつめて～の開催にあたり一言ご挨拶申し上げます。

未曾有の被害をもたらした東日本大震災の発災から10年を迎え、国が位置付けた第1期復興・創生期間が終了し、この間、多くの被災地において、インフラ等のハード面の復興が整いつつありますが、本年4月からの第2期復興・創生期間においても、多くの課題と向き合いながら前進していかねればなりません。

これまで復興支援に積極的に関わってきた本会は、農山漁村地域の活性化に寄与する『地域づくり』支援を事業の中軸としていることから、現在、被災地を抱えているソフト面の復興を加速させることを目的に、震災で甚大な被害を受けた岩手県・宮城県・福島県の民俗芸能保存会を、復興のシンボルとして今年3月にオープンした『マルホンまきあーとテラス（宮城県石巻市）』に招き、芸能公演とパネルディスカッションによる『第3回民俗芸能Now! in 東北 民俗芸能がつなぐ「絆」～震災から10年、更なる未来をみつめて～』を開催致します。

民俗芸能は、地域の歴史や風土の中で生まれ、地域の人々と密着し育まれてきました。震災から10年という節目に、本会は、あらためて全国の農山漁村地域住民自らが、地域アイデンティティや住民の「絆」意識の醸成について考える機会を提供することにより、地域づくりの促進に繋がるとともに、コロナ禍だからこそ新しい生活様式に即した公演の模様を国内外にネット配信することにより、本公演の目的を広く共有し、紹介する3県をはじめ東北地方への交流人口・関係人口の創出・拡大となることを切に願っております。

また、「民俗芸能Now!」が第3回を行うことができ、また、ひとえにご来場の皆様と全国の民俗芸能関係者の皆様のご支援の賜物と心より感謝申し上げます。本会は今後もこれらの取り組みを通じて、都市住民の皆様にも、様々な情報を発信するとともに、農山村地域に寄り添い、都市と農村の交流人口づくりや観光振興を支援して

まいります。結びに、今回ご協力いただきました宮城県石巻市ならびに雄勝町伊達の黒船太鼓保存会・鶴住居虎舞保存会・請戸保存会をはじめとする地域の皆様、さらに関係団体の皆様にご心より御礼申し上げます。

また、農山漁村地域に寄り添い、都市と農村の交流人口づくりや観光振興を支援して



一般社団法人 全国農協観光協会
代表理事会長 櫻井 宏

祝 辞

本日、一般社団法人全国農協観光協会による「第3回民俗芸能Now! in 東北 民俗芸能がつなぐ「絆」震災から10年、更なる未来をみつめて」が開催されますことに、心からお祝いを申し上げます。

一般社団法人全国農協観光協会様におかれましては、「農村と都市で暮らす人を笑顔にする」ことを目指し、農山漁村をはじめとする地域の振興・活性化、および観光の振興と促進を行い、国民が豊かな生活を送ることができ、地域社会の創造に寄与することを目的として、全国各地で様々な事業を展開されておられますことに、深甚なる敬意を表す次第です。

今回で第3回目となる「民俗芸能Now!」では、岩手・福島・宮城の3県で活動されている民俗芸能団体による公演と、「震災から10年、更なる未来を見つめて」というテーマでパネルディスカッションが行われます。

宮城県からは、石巻市の雄勝地区で長年活動が続けている雄勝町伊達の黒船太鼓が出演されます。当団体は、石巻市に合併する以前の雄勝町が1991年に町制施行50周年記念事業として発足された創作和太鼓団体で、石巻市内の様々な行事で演奏活動を行っており、特に「サン・ファン・パウティスト号」によってローマを目指

した支倉常長一行の苦難と達成の歓喜を表現した演目が代表的で、地元をテーマにした曲を多く演奏しています。

また、本日の会場となるマルホンまきあーとテラスは、被災した石巻文化センターと石巻市民会館の後継となる複合文化施設として、全国の皆様から多大な御支援をいただき、今年4月に開館いたしました。この復興のシンボルのひとつである本会場で行われる3県の民俗芸能の公演は大変意義深く、そして、公演を通じて、新たな交流が生まれ、広まり、新しい絆が生まれることを心からご期待申し上げます。

結びに、貴団体のますますの御発展と本日の公演の御盛會を祈念申し上げます、お祝いの言葉といたします。



石巻市長
齋藤 正美



岩手県釜石市

鵜住居うのすま



岩手県

釜石市



釜石市の歴史

釜石市は岩手県の南東部、三陸復興国立公園のほぼ中央に位置し、半島部と入り江が織りなすリアス海岸の優美な景観で知られます。ウニ、ホタテなど季節の新鮮な海の幸のほか、山菜や甲子柿など山の幸も豊富です。海洋の影響と地理的条件から、四季を通じて温暖な気候に恵まれており、豊かな自然のもとで農林漁業を中心とした暮らしが営まれてきた一方、江戸時代末期に日本で初めて洋式高炉による鉄の連続出銚連続出銚に成功。以来、製鉄業が発展しました。また、技術開発などにより水産業も盛んとなり、東北有数の産業都市となりました。



昭和12年に市制施行、昭和30年には周辺の甲子村、鵜住居村、栗橋村及び唐丹村の4村と合併し、今日に至っています。

繁栄の歴史の陰では、凶作や飢饉にはじまり、地震、津波や台風などの自然災害、更には戦災などにより大きな被害を受けることがありましたが、不撓不屈の精神と多様な人材の受容で乗り越え、まちを再生してきました。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災により受けた被害は、死亡者、行方不明者併せて1,064人（関連死認定者数106人含む）（令和3年1月1日現在）、家屋被害4,704戸と甚大なものでしたが、国内外からの様々な支援・協力のもと復興を進め、市民・企業・行政が一体となってまちづくりに取り組んでいます。

うのすま いとら まい 鵜住居虎舞

パネリストプロフィール

おぼらまさと
小原正人 / 鵜住居青年会 会長

岩手県釜石市鵜住居町出身。虎舞は小学3年生から始め、2018年から会長。伝統芸能の伝承だけでなく、虎舞を通じて生まれた人との繋がりや次世代へと繋げていきたい。



① 通り囃子

お祭りの際に、神社仏閣などにお参りする際に囃される。演目の始まりと終わりに囃される。

② 矢車(遊び虎)

虎頭を使った舞。端午の節句の鯉のぼりの上で元氣よく回る矢車に太鼓のバチさばきが似ているところから名づけられた。別名を遊び虎と称し、春麗らかな日差しを浴びて無心に遊び戯れている虎のゆったりとした優雅な表情を踊りにしたものの。

③ 跳ね虎

遊び戯れていた虎も季節が変わり、秋になると狩猟シーズンを迎え、猟師に追われ、ついに傷つき荒れ狂う様子を踊りにしたものの。

④ 笹喰み

虎の武器である牙を、硬い竹で磨く様子を踊りにしたものの。

⑤ 手踊り

手さばき、足さばきが美しく余興に踊られる。

⑥ 甚句

昔ながらの素朴で縁起の良いめでたい手踊り。踊りの最後に必ず踊られる。

演目について

は、いかに後継者を育てていくかということ。練習を通じて舞の意味や祭りの楽しさを子どもたちに伝えていきたいと思っています。」と話しています。

芸能の由来

鵜住居虎舞は、太神楽(獅子舞の一種)の拍子を取り入れたようにも思われる趣を持ち、虎頭を使った踊りは優雅な舞であることから「雌虎」と称されており、手踊りが数多く伝承されているのが特徴です。地元の鵜住居神社に奉納する舞であり、鵜住居社例大祭には御神輿のお供役として参加しています。

昭和初期に銅版が巻いてある横笛が発見され、その笛には「己之松」の銘が刻まれており、言い伝えなどにより江戸時代末期の物と推測され、江戸時代中期頃に岩手県上閉伊郡より伝わったとされています。また、現存する太鼓には「明治11年」の号が記されています。昭和26年頃までは「鵜住居若者會」が継承し、その後「鵜住居青年會」が保存継承活動を続けております。

震災と今後の活動

鵜住居青年会の小原正人代表は「ようやく震災前のように町内の家々を一軒一軒回って虎舞を舞う『門打ち』ができるようになりました。今後の課題



請戸うけと



浪江町の歴史

浪江町は、福島県の浜通りの中央に位置し、東は太平洋に面し、西は阿武隈山地をはじめとした山々に囲まれ、請戸川、高瀬川など水資源に恵まれています。

町の総面積は、223.14km²で町は東西に延び、山・川・海と変化に富む地形が特徴で、生活空間は市街地、農村地域が広がる里山、漁業が盛んな沿岸部など、多様な風土が広がっています。

明治22年（1889年）に町村制施行により誕生した浪江村は、明治33年に浪江町となり、昭和28年10月に請戸村・幾世橋村と合併、次いで昭和31年5月に大堀村・荻野村・津島村と合併して、現在の浪江町が誕生しました。

福島県沖は、黒潮と親潮がぶつかる「潮目の海」であり、この海域で捕れる魚は、肉厚で身の質も良いことから「常磐もの」と呼ばれます。

請戸地区に位置する請戸漁港では、震災前コウナゴ、シラス漁が盛んで、しらす干しやちりめんじゃこなどの加工品として出荷していました。

津波によりほとんどの漁船が流失し、漁港も壊滅的な被害を受けましたが、その後漁港の復旧が進み令和2年4月8日、請戸漁港でセリが再開されました。

請戸の田植踊

佐々木繁子 / 請戸芸能保存会 会長

パネリストプロフィール

井倉美咲 / 請戸芸能保存会
福島県浪江町生まれ、福島市在住、高校2年生。小学2年から田植踊りを始める。田植踊りは請戸との少ない繋がりの一つ。田植踊りを続け、多くの人に知ってもらい、継承につなげたい。

請戸の田植踊は、福島県浪江町請戸漁港近くに、1300年前から鎮座する若野神社の安波祭に奉納されます。

安波祭は毎年2月第3日曜日に豊作と海上安全、豊漁を祈って請戸小学校の4・5・6年生の女子児童で継承してきましたが、10年前の東日本大震災の津波で若野神社、踊りの衣装、道具の全て流失、さらに福島原発の事故によって町民は避難を余儀なくされましたが「江戸時代末期から続く田植踊だけは終わりにしたくない」と、震災前の2月に踊った子ども達を集め復興し続けています。

伝来、歴史、祭りの特徴

若野神社は安波さまと呼ばれ、海上安全、豊漁、豊作も授けてくれる神としても知られています。昔、この地方は大凶作に見舞われて、村民が神社に集まり豊穰を祈願して田植踊を奉納したところ、その年は豊作に恵まれたことから、現在まで伝承されてきました。

田植踊は祭典後、社殿前で奉納。このあと、村まわりが始まります。新築や商売繁盛、踊り手の子ども達の家など巡り、それぞれの前庭で踊る浜の祭場では、午後零時半ごろから神楽に続いて田植踊を奉納。その後も村まわりをし、午後四時ごろに請戸公民館に戻り直会をし解散します。震災後は社殿前での奉納だけになりました。

演目について

田植踊の踊り手は、女役の早乙女7名(田植え)、男役の才蔵7名(苗運び)、中打ちの2名(鼓舞)、16名の構成に唄い手と太鼓のお囃子で踊る。

民謡「相馬流山」で舞い込み中打ちを挟んで早乙女、才蔵が向き合ったところで田植踊に入り、早乙女は四ツ竹を打ちながら踊り、才蔵は扇子を大きく振りかざしながら踊る。中打ちは、早乙女と才蔵の間で大きく飛び跳ねながら手持ち太鼓を打ち踊る。

田植踊のあと「大漁節」「伊勢音頭」

の手踊りが続く。

震災から10年のあゆみ

平成23年8月、いわき市での復興公演から10年が過ぎました。田植踊の復活には、全国からのご支援や浜通りの文化財を是非残してほしいと背中を押していただいたおかげで今があります。

震災の翌年から安波祭の日に合わせて、町民が多く入居している福島市内、二本松市内にある仮設住宅への訪問は6年間続けてきました。県内のイベントのほか、明治神宮の明治天皇百年祭、昭憲皇太后百年祭、出雲大社60年に一度の大遷宮、平成28年には伊勢神宮外宮に奉納させていただきました。

浪江町は帰還困難区域を除いて平成29年3月31日に解除になりました。請戸地区のほとんどは災害危険区域に指定され住めない場所になりましたが、震災から7年目の2月(平成30年)、ふるさと請戸で舞うことを叶え今も続けています。

今後の取り組み

いつもの課題を抱えながらの10年でした。今後も踊り手を集める苦労は続くと思います。請戸の子ども達はふるさとの思いが強いので、必ず継いでくれると思います。もう少し頑張らせていただき、踊りの好きな人に声をかけ「請戸の田植踊」を残し、浪江町民

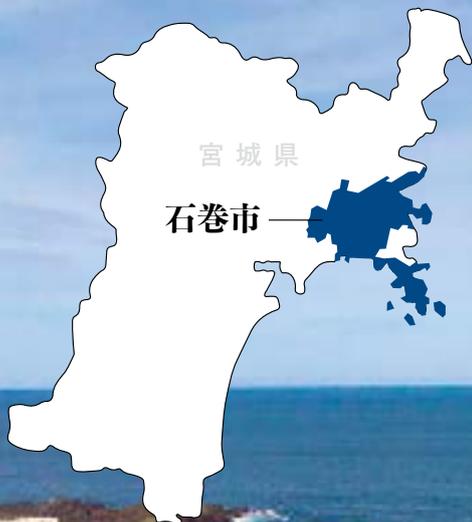
の心の支えになれるよう、その一心で継いでいきたいと思えます。
最後に、請戸の田植踊にご支援いただきました多くの団体、個人さま、すべての方々に心から感謝と御礼を申し上げます。



雄勝

お

がつ



石巻市の歴史

石巻市は、北上川の河口に位置し、宮城県北東部地域を代表する風光明媚な都市です。

伊達藩の統治下には、「奥州最大の米の集積港」として、全国的に知られた交易都市でした。明治時代からは、金華山沖漁場を背景に漁業のまちとして栄え、現在も、金華山沖は世界三大漁場の一つに数えられ、かつお・いわし・さばなどの水産資源の宝庫となっています。

また、昭和39年に新産業都市の指定を受けてからは、石巻工業港が開港するなど、工業都市としても発展を遂げてきました。

平成17年4月1日には石巻地域1市6町が合併し、新・石巻市として新たなスタートを切りました。合併した旧1市6町のうち、海岸沿いに位置する雄勝町地区は、三陸復興国立公園に指



定された、リアス式海岸の海に囲まれた水産業と工芸品の町です。

水産業は、東日本大震災以降、水揚げ量は大きく減少しましたが、宮城県一の水揚げを誇った「雄勝ホタテ」や天然のウニは自慢の一品です。

600年以上の伝統と技が継承されている「雄勝硯」は、国の伝統的工芸品の指定を受けた工芸品です。その原石は、黒色硬質粘板岩で圧縮・曲げに強いという特性から建材にも活用され、歴史的な建造物である東京駅には、大正3年に創建された際に雄勝産スレートとして使用され、近年復元された際にも使用されました。

また、今年オープン道の駅「硯上の里おがつ」から望む雄勝湾は、空と海の青さと山々の緑、さらには防潮堤の白がコントラストを織りなす風景が感動的です。雄勝半島の東側には、日本ロマンチスト協会と日本財団により認定された「恋する灯台 大須崎灯台」があり、ハート型の大須漁港が見下ろせる魅力的な場所です。

伊達の黒船太鼓

かみやままほしき
神山正行 / 雄勝町伊達の黒船太鼓保存会 会長

パネリストプロフィール

よつくらゆきひろ
四倉由公彦 / 雄勝町伊達の黒船太鼓保存会 事務局長
宮城県石巻市出身。音楽家。2011年に以前より交流があった保存会の支援をきっかけに入会。以後、郷土芸能として今後の未来に向けてどう在ることができるのか模索している。



演目について

- ① 即興演目・大太鼓（大須）
大太鼓と雄勝町大須地区の祭囃子を織り交ぜた即興演奏。
- ② 伊達の黒船
慶長遣欧使節船「サン・ファン・パウティスタ号」の建造、出帆、太平洋を渡る航海、そして無事にメキシコのアカプルコに到着の軌跡を表現。
- ③ 即興演目・組太鼓（味噌作）
組太鼓と雄勝町味噌作地区の獅子囃子を織り交ぜた即興演奏。
- ④ 凶南の響
太平洋、そして大西洋の先の遙か凶南を目指す支倉常長一行の慶長遣欧使節団の旅を表現。

今後の取り組み

これまで通りの演奏活動、雄勝中学校への指導を継続しつつ、ここ数年前より新たに雄勝町内の獅子舞、祭囃子などを記録を撮りつつ研究し、その地区の団体や有志の活動補助をしています。雄勝町胴ばやし獅子舞味噌作愛好連とは味噌作地区の獅子舞伝搬活動を共同で活動しています。

また、雄勝法印神楽保存会、雄勝町胴ばやし獅子舞味噌作愛好連、伊達の黒船太鼓保存会、住民やボランティアの有志で「おがつの芸祭〜鼓舞〜」という芸能祭の準備をしています。そう

いうイベントなどで雄勝が郷土芸能の郷である面に光を当て、震災などで雄勝を離れざるを得なかった方々がまた雄勝に来るきっかけ作りや、支援してくださった全国の方々へ感謝を伝える活動をしていきたいと思っています。

